能村研三句集

現代俳人文庫
12

砂子屋書房

能村研三句集＊目次

『騎士』（全篇）
序　林　翔
騎士　昭和四十六年～四十九年
喝采　昭和五十年～五十三年
絵本棚　昭和五十四年～五十五年
雪燃え紀行　昭和五十六年
曳航　昭和五十七年
残塁　昭和五十七年
花野にて　昭和五十七年
跋　今瀬剛一
あとがき

自撰句集
『海神』（抄）（昭和六十年刊）四九句
『鷹の木』（抄）（平成四年刊）一〇四句

『磁気』（抄）（平成九年刊）七四句
『滑翔』（抄）（平成十六年刊）七四句

俳　論

現代俳句の二重人格的現状
　―諸家自選句を読んで
父登四郎のこと
俳句の私性について
私の俳句姿勢
　―三十年の俳句自分史
主宰継承にあたって

解　説

今年の三賞　能村登四郎
資質は風土俳句　角川　春樹
　―能村研三『騎士』鑑賞
騎乗颯爽　北川　英子
　―第一句集『騎士』

『鷹の木』管見　大畑　善昭

『磁気』の位置　字多喜代子

―能村研三句集『磁気』管見

己が身を直径として　鳥居　三朗

猛牛の覚悟　小島　健

―能村研三小論

メロン包む故郷の新聞大切に

打水の山の小駅で出す手紙

裏耶馬の杉生のくらさ雷火たつ

出して見て潮鳴こもる海水着

北海道

初あらし野馬にも似たる波頭

さいはての砲座に遊ぶ秋の探

髪切りし子に小さき傷二学期へ

魚のごと地下鉄出でて霧まとふ

夕野分来ると騒げる生簀魚

青林檎置いて卓布の騎士隠る

蒼天に授かりしごと林檎もぐ

黄落のはげしさ鶏舎に鶏は留守

二枝の反りみごとなる桑括る

車窓より冬田見てをりすぐに尽く

納屋うらに鶏鳴ひとつ冬深む

新雪をためらひて掻き土の色

白菜を山積みにして富士隠す

唱和して潮騒のごと卒業歌

畦塗の帰る長靴籠に入れ

鳥曇暖流の空掩ひゐる

野村研三句集　　現代俳人文庫⑫

2005 年 10 月 7 日初版第 1 刷発行

著　者　　能 村 研 三
発行者　　田 村 雅 之
発行所　　砂子屋書房

PDF　　俳誌の salon